

□ 統括的展望

寺西基之

■アフター・コロナへ動いた音楽界

2020年からのコロナ禍において音楽団体とアーティストは活動を続けるべく様々な試行錯誤を行ってきた。すでに2022年には前年までに比べて演奏会の中止や変更が激減し、また海外からの来日団体も増えるなど、正常化に向けての努力の成果が現われてきていたが、2023年は5月8日にコロナの感染法上の位置付けが2類から5類へと移行されたこともあり、本格的なアフター・コロナの時代に向けて動いた年となった。

5月に5類に引き下げられたといっても、その時点から音楽界が大きく変わったということではない。2023年の年頭はまだコロナ第8波のさなかにあったにもかかわらず、前年からの演奏会の回復の流れは止まることなく、例えば3～4月の東京・春・音楽祭では前年に引き続いてのリカルド・ムーティのオペラ・アカデミーをはじめ、若手ピアニストのキット・アームストロングによる鍵盤音楽史の流れを探るリサイタル・シリーズなど、多彩なプログラムが1か月間にわたって開催され、上野の街を賑わせた。またコロナ禍で2020年以来中止が続いていたラ・フォル・ジュルネも5類移行直前のゴールデンウィーク中に4年ぶりに復活、コロナ前に比べると規模は縮小されたものの、外国からも多くの演奏家を招いてベートーヴェンをテーマとした多数の演奏会が開催され、完売公演も続出するなどの盛り上がりを見せた。

このように5類移行前にもアフター・コロナを見据えた動きは高まっていたが、5類に移行したことで起きた大きな変化のひとつは、それまで必須だったホールの入り口での検温やアルコール消毒、マスク着用などが義務でなくなったことで、これは主催者やホールにとつての負担を軽減することになった。また会場ロビーでのCD販売やサイン会が可能となったことはCD業界にとっては大きかった。わずか数か月前にはコロナ第8波が猛威を振るっただけであり、その後も依然としてコロナの流行が尾を引いていた中でこうした規制解除である。大人数が集まる会場でいきなりの解除は大丈夫かという懸念を抱く向きも当初はあったのも当然だろう。しかしそれは杞憂だったようで、こうした変化はそれまでの音楽界の正常化の流れを大きく後押しし、5月以降コロナ前の演奏会のあり方が急速に戻ってくる。

■海外団体の来日ラッシュ

特に2023年後半の音楽界はコロナ禍での停滞を巻き返すかのような活気を呈することとなった。それが顕著に現われたのが海外からのオーケストラやオペラ団体の来日公演である。オペラでは6月にパレルモ・マッシモ劇場(《ラ・ボエーム》と《椿姫》)、9月にはローマ歌劇場(《椿姫》と《トスカ》)、11月にはボローニャ歌劇場(《トスカ》と《ノルマ》)といったイタリアの3つの歌劇場が相次いで日本への引越し公演を行ない、外国のオペラ団体の来日を心待ちにしていたファンの渴望を満たした。

それ以上に目立ったのが秋のオーケストラの来日ラッシュである。すでに前年も秋にはかなりの海外オケが来日したが、2023年はその比ではなかった。10月にパーヴォ・ヤルヴィとチューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、クラウス・マケラとオスロ・フィルハーモニー管弦楽団が同時期にやって来たのを皮切りに、10月末にはセミヨン・ビ

シュコフとチェコ・フィルハーモニー管弦楽団、内田光子とマールー室内管弦楽団が来日、そして11月に入るとファビオ・ルイーゼとロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、トゥガン・ソビエフ(当初予定のフランツ・ウェルザー＝メストの代役)とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、キリル・ペトレンコとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、アンドリス・ネルソンスとライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団といった歴史と伝統を誇る4つの名門オケが次々と日本を訪れ、さらに11月末にはアラン・ギルバートとNDRエルブ・フィルハーモニー管弦楽団が続くというように、10月から11月にかけてのヨーロッパのオケの来日の重なり方はコロナ前にもなかったほどにすさまじいものがあった。チケット代はコロナ前に比べてかなり高価になっており、これほど短期間に集中して外来オケの演奏会が開催されて果たしてチケットが捌けるのかという懸念もあったが、蓋を開けてみれば売れ行きはおおむね好調で、完売公演も出るなど、一般的に盛況ぶりを見せたことは、いかに日本の聴衆が海外の名門オケの来日を待ち望んでいたかの現われだろう。とりわけベルリン・フィルは首席指揮者ペトレンコとの初めての来日となっただけに前評判が高く、実際のオケ伝統の重厚な響きと機能性を生かした彫琢された表現は今日の世界のオーケストラ界の最高峰というにふさわしいものがあった。外来演奏家のリサイタルや室内楽の注目公演も、84歳とは思えない研ぎ澄まされた演奏を聴かせたオーボエの巨匠ハイッツ・ホリガーから、熱狂的なファンを持つブルース・リウヤイム・ユンチャンなどの若手人気ピアニストまで、個別に挙げられないほどの夥しい数にのぼった。

■国内団体と日本人演奏家のめざましい活動

こうした海外勢に対抗するように、国内の団体と日本人音楽家の活動も年間通してめざましいものがあった。オペラでは、音楽監督大野和士が振った新国立劇場《シモン・ボッカネグラ》や、沼尻竜典の芸術監督としての最終公演となったびわ湖ホール(《ニュルンベルクのマイスタージンガー》)などが際立っていた。民間のオペラ団体やホールが比較的上演機会の少ない作品を積極的に取り上げたのも注目すべきで、東京二期会のR.シュトラウスの《平和の日》や三島由紀夫原作に基づくヘンツェの《午後8時の曳船》、藤原歌劇団のヴェルディの《二人のフォスカリ》、日生劇場のケルビーニの《メデア》などはいずれも大きな成果を収めた。

オーケストラの公演でも意欲的な企画がみられた。特に東京都交響楽団が山田和樹の指揮で取り上げた三善晃の反戦三部作《レクイエム》《詩篇》《響紋》(もともと2020年に予定されていた企画の延期公演)や、読売日本交響楽団がセバスティアン・ヴァイグレの指揮で日本初演したアイズラーの《ドイツ交響曲》などは、今日の世界情勢にあつて意味深い公演であったといえよう。大野和士と東京都響がヴァイオリニストのバトリツィア・コパチンスカヤと共演した「リゲティの秘密」と題した演奏会も、リゲティ生誕100年を飾るにふさわしい鮮烈な印象を残した。

2023年のオケの活動では、楽団主催による演奏会形式もしくはそれに準じる形の上演によるオペラものの企画がとて多かつたことが注目される。中でもジョナサン・ノット指揮の東京交響楽団による《エレクトラ》、チョン・ミョンファン指揮東京フィルハーモニー交響楽団の《オテロ》、沼尻竜典が神奈川フィルハーモニー管弦楽団、京都市交響楽団、九州交響楽団の3つの楽団で同じキャストによって取り上げた《サロメ》、高関健指揮東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の《トスカ》などはきわめて高い評価を得たのはじめ、柴田真都指揮大阪交響楽団の《ルサルカ》もすばらしい成果を上げ、またふだんはオペラとはやや緑濃い感のある日本フィルハーモニー交響楽団も広上淳一の指揮で《道化師》を取り上げている。井上道義指揮の新日本フィルハーモニー交響楽団による井

上自作のミュージカル・オペラ《A Way from Surrender～降福からの道》の初演も大きな話題となった。古楽団体のバッハ・コレギウム・ジャパンは鈴木優人の指揮でヘンデルの《ジュリオ・チェーザレ》を上演、バロック・オペラの面白さを質の高い演奏で示した。

日本人の若手アーティストの活躍も目立った。特に反田恭平、藤田真央、牛田智大、辻井伸行、角野隼斗、亀井聖矢など、実力とともに熱烈なファンを持つピアニストの演奏会がチケットの入手が困難なほどの人気ぶりを示した。弦楽器や管楽器も新しい才能ある若手が次々と出現し、室内楽でもカルテット・インテグラをはじめとする新しい世代のグループが頭角を現わしてきている。

音楽祭もすでに触れた東京・春・音楽祭やラ・フォル・ジュルネのほか、ほぼ正常どおり開催された。宮崎国際音楽祭では最終日に広上淳一の指揮でヴェルディの《仮面舞踏会》を演奏会形式で上演、別府アルゲリッチ音楽祭ではマルタ・アルゲリッチとチョン・キョンファの2大巨匠の歴史的ともいえる世界初共演が実現し、セジ・オザワ松本フェスティバルではジョン・ウィリアムズがサイトウ・キネン・オーケストラを振って自作を演奏するなど、話題の公演が多かった。サントリーホール・サマーフェスティバルでの三輪眞弘によるガムランに焦点を当てた企画も興味深い内容だった。

■活況の裏での諸問題

2023年の音楽界はどのようにコロナ禍での冷え込みから脱したとてよいかもわからないが、一方でその裏では様々な困難な問題や課題も存在した。コロナ禍において国からの文化芸術活動の支援として行なわれてきた文化庁の「アートキャラバン事業」も、2023年度は規模が縮小されたものの一応継続された。しかしこうした大型支援は今後は望めなくなるようで、国内の団体やアーティストにとっては将来に向けての懸念される材料も生じている。また売れ行き好調の公演が続出したようにみえても、全体からみればあくまでそれは一部にすぎず、内容の良し悪しに関わらず集客に苦しむ演奏会は依然として多かった。特に地方ではコロナ以後、客がなかなか戻ってこないところが少なくないようだ。オーケストラの演奏会で集客を見込める人気アーティストをゲストに迎えることは以前からあったことだが、その傾向はますます顕著になり、来日オケの演奏会でも日本の若手スターを協奏曲のソリストとして起用した演奏会が多かった。わが国の名手たちが外国のオケと共演すること自体は決して悪いことではないし、実際優れた演奏がいくつもあったが、やはりオーケストラの演奏会が集客にあたって協奏曲のソリストの人気に頼るのは本末転倒といえるだろう。

すでに触れたように海外からの来日が本格的に復活したように見えるが、招聘するにあたっては円安や航空運賃・貨物運賃の高騰は大きな負担となり、チケットの値上げをもたらした。名門オケはそれでも大入りとなったものの、採算はまったくとれておらず、ある海外の名門オケを招聘している大手マネージメントの担当者は「コロナで来日がずっと延期されてきて、今回は相手方との関係を断ち切らないためにかなり無理をして招聘に踏み切った」とこぼす。ロシアのウクライナ侵攻に起因する様々な深刻な問題が続いているのに加えて、新たに生じたイスラエルのガザ侵攻で当初予定されていた11月のイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団の来日が中止になるなど、不穏な国際情勢が音楽界にも大きな影を落としている。

総じて2023年の音楽界は、一見したところではコロナ禍での落ち込みを一挙に取り戻そうとするかのような活況ぶりが見られたが、それがパブ的な現象のようである点、これからの音楽界の行く末が気になる点がある。

■『レコード芸術』休刊の衝撃

2023年の音楽界を揺るがせ、音楽関係者と音楽ファンに大きな衝撃を与えた出来事が、音楽之友社の『レコード芸術』の休刊(事実上の廃刊)だった。『レコ芸』の愛称で親しまれたこの月刊誌は、1952年に創刊されて以来、実に70年以上という長い歴史を誇り、日本の音楽雑誌の主軸となってきた。その中心となるレコード評・CD評をととしてレコード文化・CD文化の発展に多大な寄与をしてきただけではない。内外の演奏家のインタビュー、世界の音楽界の動向やニュース、音楽学者や評論家や文化人による論考やエッセイなど、一般の愛好家から専門家までの幅広い層を取り込むような様々な記事を多数掲載することによって、多角的な視点から音楽文化を考察し論じてきたその充実した内容は、他の音楽誌にはまったくないものであり、日本におけるクラシック音楽文化の普及と振興に果たしてきた役割には測り知れないものがあった。

もちろん休刊の打撃をもっとも大きく被ったのはCD業界であることは間違いない。そうでなくても今CD業界は、インターネットの普及に押されて衰退傾向にある。『レコ芸』は充実したCD評や詳細な新譜情報によって、そうした苦しい状況にある業界を支える役割を果たしてきた。その『レコ芸』が休刊となると、CDに関して得られる情報がきわめて限られてしまうので、もともと減少傾向にあった購入者がさらに減ってしまうことにつながり、CD業界をいっそう窮地に追い込むとともに、CD文化の衰退を加速させてしまうことになる。

休刊の理由としては「当該雑誌を取り巻く大きな状況変化、用紙・印刷など原材料費の高騰」が挙げられており、昨今の出版業界の厳しい状況にあつての苦渋の決断だったと思われるが、休刊のもたらした影響の大きさもあつてか、WEBへの移行はしないという当初の方針は撤回され、本稿を書いている2024年初めの時点ではクラウドファンディングによって資金を得てWEB版『レコード芸術ONLINE』を立ち上げる方向で動いていることが発表されている。WEB版はこれまでの紙媒体とは性質の異なるものとなるだろうし、実現までには紆余曲折もあるだろうが、これまで音楽文化に寄与してきた『レコ芸』の実績を受け継ぐような形が出来上がることを願うばかりである。

■相次いだ音楽家の訃報

2023年はわが国を代表する音楽家の訃報が相次いだ年でもあった。作曲家ではかつての日本の前衛音楽の流れをリードした松平頼暁(享年91)、今日の作曲界の中心的存在でまだまだ働き盛りであった西村朗(享年69)、ジャンルを越えて幅広い音楽活動を展開し東日本大震災の被災者支援や脱原発などの社会的な活動にも力を入れた坂本龍一(享年71)が世を去った。同じく作曲家であるとともに、指揮者として日本のオーケストラ界を長年にわたって牽引してきた外山雄三(享年92)は、パシフィック・フィルハーモニア東京の定期演奏会を振っている途中で体調が悪化して降板、ほどなく亡くなったというまさに生涯現役の音楽家だった。やはり生涯現役で急逝した飯守泰次郎(享年82)はかつてパイロイト音楽祭の助手を務めるなど長年のドイツでの経験を踏まえ、日本にドイツ音楽の真髄を伝えた名指揮者で、亡くなる数カ月前に東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団とともにブルックナーの名演を聴かせたばかりだった。さらに日本人初のベルリン・フィルの奏者となったヴィオラの土屋邦雄(享年89)、新日本フィルの首席フルート奏者として活躍した峰岸壮一(享年90)、演出家として日本のオペラ界の発展に貢献した栗山昌良(享年97)が鬼籍に入るなど、戦後から今日までの楽壇を牽引してきた偉大な人たちがこの世を去ったことは寂しい。